



映画「草の上の月」(3月28日よりシネマ・カテで公開)のワンシーン。ケイエスエス配給。



「スタンド・バイ・ミー」より。写真提供 川喜多記念映画文化財団

# 歩くという 視点で映画 を見ると…

金丸弘美

冒険と大人への入り口は歩くことから始まるのだと教えてくれたのは「スタンド・バイ・ミー」(一九八六年)だ。オレゴン州の小さな町に住む四人の少年は、一九五九年の夏、線路沿いを歩いて旅に出る。目指すのは五〇キロ先のハローウ・ロード。列車にはねられた死体があるという。彼らは、その発見者になって有名になるというのが、旅の理由だ。この旅で、喧嘩をし、夜の怖さを知り、友情を深め、大人への道を確実に刻むのである。

歩くことは、人生の喜びであり希望そのものだったのは「レナードの朝」(一九九〇年)だ。一九三九年、突然眠ってしまったレナード(ロバート・デ・ニーロ)は、一九六九年、医者レイヤー(ロビン・ウィリアムズ)の新薬投与で三〇年ぶりに目覚める。レイヤーはレナードを連れて、生まれた町の散歩に出る。このときのレナードの感無量な表情。再び、病院に戻ったレナードの、心からの願いは「自由な散歩」だった。

歩くことがキャリアアップにつながったのは「ワーキング・ガール」(一九八八年)だ。テス(メラニー・グリフィス)は、マンハッタンの証券会社勤務。通勤はスニーカー、会社でヒールに履き替えるのである。学歴のないテスだが秘書室に勤務するチャンスをつかむ。だが信頼した上司に裏切られたテスは、上司を飛び越え、取引先の交渉をものにする。マンハッタン中を歩き、時に走り、情報も相手との交渉も、彼女の足が形にするのだ。歩くことはロマンスもあふれている。新作



17世紀に実在したイタリアの女流画家を描いた「アルテミシア」(ル・シネマで今春公開)より。エース・ピクチャーズ配給。

「草の上の月」(一九九六年)は、一九三八年のテキサスが舞台。伝奇作家ロバート・E・ハワード(ヴァインセント・ドンフリーオ)と、教師ノーベリン(レニー・ゼルウィガー)の实在の恋を描いたもの。二人のデートは、ドライブと散歩、そして映画。何度かめのデートは川の見える丘。彼女は「世界が見える」と言い、彼は「歴史も」と語る。散歩は二人だけの世界、お互いを知る場でもあるのだ。

歩くことは、人生であり、生きかたであり、希望でもある。それを如実に見せてくれたのは、実在した一七世紀のイタリアの女流画家を描いた「アルテミシア」(一九九七年)だ。画家の娘だったアルテミシアは、女性が絵の学校に行くことを許されなかった時代、自分の表現を求めてタブーを押し退け生きる。デッサンを持って画家のもとへ走ったり、散歩で絵画法を学んだり、彼女はいつも未来を見つめて歩く。その力強さは、そのまま彼女の絵の素晴らしさに通じるものだった。

かなまるひろみ  
一九五二年生れ。マセーヤルホルタージニ、映画紹介などの執筆をはじめ、雑誌や単行本の企画、制作など、多彩な分野で活躍。近著は『まともな食べ物を食べたい』(ダイヤモンド社)、『はかにふるさとときやはなが走る』(白水社)、『こんなシーンで贈り物』、『こんなシーンでウエディングベル』(共にベネッセコーポレーション、編著作に)、『宮武外骨絵葉書コレクション』(無明舎出版)などがある。